

## 禪宗の教學發達に就て (二)

伊 藤 古 鑑

(一)

道安の入寂後十六年にして鳩摩羅什は北方長安へ來朝せられた。即ち姚秦の弘始三年十二月二十日(皇紀一〇六二)であつて、その弟子の僧叡が書いた『小品經序』に「弘始三年歲次星紀冬十二月二十日至長安」(『大正藏經』第五十五卷五三丁)とあるから確實と云はねばならぬ。羅什は龜茲國の人で、幼少の時に出家して罽賓に行き、盤頭達多に遇ふて「阿含」を受け、それより西域の諸地方を歴遊して小乘教を學び、更に須利耶蘇摩に従つて『中論』『百論』を學び、終に大乘經論を研究して盛名を馳せた人であつた。秦王姚興の招きに應じて長安に入り、西明閣、及び逍遙園で譯經に従事したのである。その翻譯の經論は『出三藏記集』第二には三十二部三百餘卷と云ひ、『歷代三寶記』第八には九十八部四百二十五卷と云ひ、『大唐內典錄』第三『古今譯經圖記』第三にも、これを踏襲して居るやうに思はれる。「開元釋教錄」第四にはこれを刪正して七十四部三百八十四卷として居る。而して翻譯の主なるものは『小品般若經』四十卷、『大智度論』一百卷を始め、『中論』『十二門論』『百論』『金剛般若經』『維摩經』『首楞嚴三昧經』の如きであつて、その他『法華經』とか『成實論』とか云ふ

禪宗の教學發達に就いて

(一)

ものも翻譯せられて居るが、大體に於て羅什は龍樹提婆の般若空宗に屬する人と云はねばならぬ。而して前の道安と同じ思想の人で、寧ろそれを學的に進めたと云ふことが出来る。即ち道安には未だ論部の研究と云ふものがなかつたが羅什に至つては論部を翻譯し、論部を研究したからであらうと思はれる。

(11)

次に羅什の禪經に對する翻譯は『出三藏記集』第二に、

一、『菩薩呵色欲經』一卷

二、『禪法要解』二卷或云禪要經

三、『禪經』三卷一名菩薩禪法經與坐禪三昧經同

四、『禪法要』三卷弘始九年閏月五日重校正

の四部九卷を出だし、歷代三寶記第八には更に、

五、『禪秘要經』三卷見別錄。或無經字。或云一卷

六、『思惟要略法經』一卷或無經字

の二部四卷を加へて居る。而して現に『大藏經』の中に收められて居るものは『禪秘要法經』三卷、『坐禪三昧經』二卷、『菩薩呵色欲法經』一卷、『禪法要解』三卷、『思惟要略法』一卷の五部九卷であつ

て、共に『大正藏經』第十五卷に收められて居る。

先づ『禪秘要法經』に就ては、『開元釋教錄』に依つて見ると、羅什譯の外に支謙譯と曇摩蜜多譯とがあつたと云ふけれども、現存のものは羅什譯として傳はつて居る。しかし一説には現存の羅什譯を以て羅什譯にあらず、多分は曇摩蜜多譯出のものであらうと云はれて居る。(註一)また一説には『出三藏記集』の羅什譯の下に『禪法要』三卷とあるは、これ『禪秘要法經』を指したもので、現存の羅什譯はそれに當るであらうと云ふ説もある。(註二)要するに此の『禪秘要法經』は譯者にも異論あり、また其の内容も充分に纏まつたものとは思へない。先づ現存の『禪秘要法經』に就て内容を云ふならば、三十種の觀法を説き、終りに得阿羅漢道の觀法と行者の用心とを説ひて居る。即ち三十種の觀法とは、第一に不淨觀、第二に白骨觀、第三に津膩慚愧觀、第四に臙脹膿血觀、第五に薄皮觀、第六に厚皮蟲聚觀、第七に游泥濁水觀、第八に新死想觀、第九に具身想觀、第十に節節解觀、第十一に白骨流光觀、第十二に九十八使境界觀、第十三に結使根本觀、第十四に易觀法、第十五に四大觀(已上上卷)第十六に四大補想觀、第十七に身念處觀、第十八に十色不淨觀、第十九に觀佛三昧灌頂法第二十に數息觀、第二十一に暖法觀、第二十二に頂法觀、第二十三に助頂法方便觀、第二十四に身火大觀、第二十五に身火大無我觀、第二十六に正觀得須陀洹道(已上中卷、第二十六觀は下卷に互る)第二十七に向斯陀含火大微妙觀、第二十八は無く、第二十九に得斯陀含道、第三十に得阿那含

道である。而して其の最後に得阿羅漢道を擧げ、更に禪法修行者の用心を説いて居るが、今この一經に就て深く考へて見ると、第一より第十八までは不淨觀そのものを説明して、その觀法の進展を示したものと見ることが出来る。而して不淨觀の目的は貪欲を對治するにあるので、その結果は貪欲を去り自心を清淨に持たなければならぬ。故に自己の罪障を除く方法として、第十九の觀佛三昧、第二十の數息觀となつた譯であらう。續いて觀法の進展は第二十一已下の觀法となり、暖法頂を得、更に四向四果の階梯を説明して、最後の得阿羅漢道に及んで居る。故に一經の内容は極めて坐禪觀法の順序を微細に説いて居るので、終始一貫常に不淨觀を基調として進み、不淨觀は淨觀に進展し、更に淨も不淨もなき空相應の心境界に到つて始めて不淨觀の目的は達せられたと云ふので、經の終りには空觀をいろ／＼の方面より説いて居るが、要は空、無相、無願の三空門に結歸して居るやうに思ふ。しかし空と云ふても大乘的ではなく、得阿羅漢道の範圍を出でぬもの、やうで、經の全體を通じては小乘的であると云はねばならぬ。第十一の白骨流光觀のところ、或は最後の空觀のところには、眞如とか如實際とか云ふて大乘的の説明もあるが、それは一少部分であつて論ずるに足らぬ。(註三)尙ほこの經を讀んで不審に思つたのは、四種の經典を纏めて一經の連絡を付けたものではなからうかと思はれる點で、第一に王舍城迦蘭陀竹園に於て摩訶迦綺羅難陀の爲めに第一より第十八までの不淨觀を説いたところ、第二に舍衛國祇樹給孤獨園に於て禪難提の爲めに



卷もあつたと云ふて居るが、共にこれは誤りで(註四)『開元釋教錄』第十三にも左の如く云ふて居る。

右群錄中、復有阿蘭若習禪法經二卷、云與坐禪三昧經同本異譯、亦云羅什法師所出、尋閱文句首末全同、但爲殊名分成兩部、既非別譯未可雙行(『大正藏經』第五十五卷六二丁)

『坐禪三昧經』の内容に關しては『出三藏記集』第九に收められて居る僧叡の『關中出禪經序』に依つて見ると、

禪法者向道之初門、泥洹之津徑也、此土先出修行大小十二門大小安般、雖是其事既不振悉、又無受法、學者之戒蓋闕如也、究摩羅法師以辛丑之年十二月二十日、自姑藏至長安、予即以二月二十六日從受禪法、既蒙啓受、乃知學有成准法有成條、首楞嚴經云、人在山中學道、無師道終不成、是其事也、尋蒙抄撰衆家禪要得此三卷、(註五)初四十三偈是究摩羅陀法師所造、後二十偈是馬鳴菩薩之所造也、其中五門是婆須蜜、僧伽羅叉、漚波崛、僧伽斯那、勒比丘、馬鳴羅陀禪要之中、抄集之所出也、六覺中偈、是馬鳴菩薩修習之、以釋六覺也、初觀姪怒癡相及其三門、皆僧伽羅叉之所撰也、息門六事諸論師說也、菩薩習禪法中、後更依持世經益十二因緣一卷要解二卷……出此經後、至弘始九年閏月五日重求檢校、懼初受之不審、差之一毫、將有千里之降、詳而定之、輒復有所正、既正既備無間然矣(『大正藏經』第五十五卷六五丁)

と云ふて居る。故にこの序文に依つて云ふならば、『坐禪三昧經』は梵本があつたと云ふ譯ではな

い、みな印度に於ける禪觀に關する説を集めて、それを一書として翻譯し、弟子の僧叡に授けたものである。即ち始め羅什が弘始三年十二月二十日に長安に着し、その月の二十六日に僧叡は禪法を受け、その翌年正月五日には、この『坐禪三昧經』を譯出し、(註七)更に同九年閏月五日に重ねて校正したものが現存の『坐禪三昧經』二卷のやうである。その内容は始めに小乗の五停心觀より説いて四禪四定、四無量心、得五道の課程を経て、四念處四善根、無漏十六心、四向四果、辟支佛、菩薩の五種法門等を説き、最後に行者の用心を擧げて居るのであるが、良く小乘禪と大乘禪とを融合せしめて、禪觀修行の全體を一貫せしめて居ると云ふことは、恐らく禪經中の第一位に置くべきものであらう。今更に其の内容を深く検討して見るならば、最初の四十二偈は究摩羅陀の作、最後の二十偈は馬鳴の作であり、その中間の五門たる治貪欲法門、治瞋恚法門、治愚痴法門、治思覺法門、治等分法門の中、前の三門は不淨觀、慈心觀、因緣觀であつて、僧伽羅叉の所説を譯したものと云はれて居る。僧伽羅叉は僧伽羅刹のことで、元、明の『大藏經』には『坐禪三昧經』の題號の次ぎに「僧伽羅刹造」と明記して居るが、しかし一經の全體が僧伽羅刹の作ではないのであるから、これを作者として擧げるのは悪い。然してこの僧伽羅刹は『修行道地經』の撰者たる僧伽羅刹であるかと云ふことも、兩經の内容から検討して見る必要があらうと思ふ。(註七)次ぎに五門の中の第四門は數息觀であり、第五門は念佛觀であるが、その中に於て特に數息觀を細釋し、六妙門、十六特勝、六覺

をも説明して居る。六覺とは六妙門の最初の數に於て六種の惡覺作用(註八)を除くことで、この六覺を釋せる偈は馬鳴の作と云ひ、また六妙門とて數、隨、止、觀、轉、降の六事は諸論師の説、その他の五門の説明は多く婆須蜜等の禪要から抄集したものと云ふのである。

已上の五門の説明は『坐禪三昧經』の上卷に於ける所明で、これを悉く欲界定に屬する禪觀であるから、更に下卷に於ては色界に進んで初禪を學び愛欲を呵棄せなければならぬと示し、それより向上して色界の四禪、無色界の四定を説明し、これ等の地々に於て慈悲喜捨の四無量心觀を修し、五通を學べと云ひ、その中特に第一の神足通のみを説明して、餘通は『摩訶衍論』に説くが如しと結んで居るが、更に無漏の觀智の進展を説いて四念處觀、四諦十六行相觀に依り四善根位を示し、見道十六心より四向四果を明かして最後の阿羅漢果までを説き、辟支佛より菩薩の禪觀にまで及んで居る。即ち菩薩の禪觀は本經の特に意を用ゆるところで、前の五門たる念佛觀、不淨觀、慈心觀、因緣觀、數息觀を明かし、特に因緣觀を細釋して十二因緣と空、十二因緣と四諦、四諦と三十七科の道品との關係等を説明して居るが、要するに此の菩薩の五種禪觀は、前の五門と同じ名目であるけれども、その説明の内容に至つては大に淺深があると云はねばならぬ。即ち前者は小乘禪であり、今は大乘禪であつて、同じ五種法門を基調とするところに、大小乘の禪觀を一系統の中に融合せしめて居る觀があつて、非常に注意せなければならぬところであらうと思はれる。



羅什の禪經の五部ある中、『禪秘要法經』と『坐禪三昧經』との内容を説明したが、次ぎの『菩薩訶色欲法經』は女色を叱呵した經典で、三百餘字の一小經に過ぎぬ。次ぎの『禪法要解』は二卷あつて、『開元釋教錄』第四には沮渠京聲のところに、

禪法要解二卷第二出與羅什出者同本見長房錄

とあるが、これは『歷代三寶記』第九の錯誤から來たもので、沮渠京聲譯は『治禪病秘要經』二卷(『大正藏經』第十五卷三三三丁)と云ひ、羅什譯の『禪法要解』とは同本ではない。その内容は五門の禪觀を擧げて居るが、その中特に不淨觀、慈心觀に依つて、四禪四無色定へと進んで行く禪觀の楷梯を示し、最後に變化、天耳、他心、宿命、天眼の得五通を細釋して居るやうに思ふ。次ぎの『思惟略要法』は『出三藏記集』に載せてないから、文献上よりして羅什譯の確證に乏しい、却つて『出三藏記集』には安世高譯のところに『思惟經』一卷或思惟略要法とあるから、安世高譯とした方が良いかも知れぬ、しかし現存のものは譯語、内容から云ふて安世高譯とは信じられない。その内容は四無量觀法、不淨觀法、白骨觀法、觀佛三昧、生身觀法、法身觀法、十方諸佛觀法、觀無量壽佛法、諸法實相觀法、法華三昧觀法の十種であつて、何れも簡単な叙述であるが、相互の連絡を缺き、内容の見るべきものはなし。強して云へば後の三種觀法に於て大乘禪觀の特色を發揮したと云ふ位に過ぎぬ。

已上に於て羅什三藏の翻譯せし禪經の内容を悉く述べ畢つたのであるが、更にその思想の全體を概論するならば、彼れは第一に有らゆる禪觀に統一を付けたと云ふことである。『坐禪三昧經』は印度及び西域地方に行はれて居た禪觀に關する説を集めたものと云はれるが、その内容は凡夫外道の禪と佛弟子小乗の禪と菩薩大乘の禪との三種である。凡夫外道の禪は欲界色界無色界の禪であつて得五通を究竟とし、佛弟子小乗の禪は四善根四向四果の禪であつて得阿羅漢道を究竟とし、菩薩大乘の禪は諸法實相の禪であつて無上佛道を究竟として居るのである。而して羅什三藏はこれ等を巧みに統一したと云ふことを認めねばならぬ。第二に有らゆる禪觀は五門の禪を以て基調としたと云ふことである。即ち大小乗共に五門の禪觀を基調となし、終始一貫して居ることで、『坐禪三昧經』に於て特に見られ、『思惟略要法』に於ても十種の觀法を五門の禪觀に配當することが出來ると思ふ。(註九) 第三に五門の禪觀の中に於て特に不淨觀と數息觀との二甘露門を以て主として居ること、不淨觀は『禪秘要法經』『禪法要解』に於て廣説し、數息觀は『坐禪三昧經』に於て細釋して居るやうに思はれるが、しかしこれは從來の禪觀者が等しく取つた態度で、別に羅什のみに局らぬのである。羅什として特に注意すべきは念佛觀、因緣觀の力説ではなからうか。彼れが觀佛三昧とか、生身觀法、法身觀法、諸佛觀法、觀無量壽佛法とか云へる如きは念佛觀であり、『坐禪三昧經』に於ける菩薩の禪觀には因緣觀を細釋し、また『思惟略要法』の諸法實相觀も因緣より説き起して、畢竟空

無所有を詮顯して居るが、これは彼れが大乗禪を鼓吹した結果に依るものであらう。第四に彼れは空を力説したことで、不淨觀は貪欲を除去せんが爲めの觀法であらうけれども、彼れが『禪秘要法經』『思惟略要法』に於て、白骨觀等を特に高唱したと云ふことは、畢竟空を説かんが爲めではなからうか。また因緣觀を細釋したのも、その結歸するところは緣生無性の道理を詮顯する爲めで、空思想に外ならぬものと思ふ。第五に實相に對する思想で、素より彼れの實相觀は空の異名に過ぎないけれども、兔に角、實相觀まで言及せやうとした態度は見遁がしてならぬと思ふ。即ち『坐禪三昧經』に於ても「摩訶衍中諸法實相、實相不可破、無有作者、若可破可作此非摩訶衍」(『大正藏經』第十五卷二八四丁)と云ひ、『思惟略要法』に於ても「是法不在內不在外、若在內不應待外因緣生、若在外則無所住、若無所住亦無生滅、空無所有清淨無爲、是名姪怒癡實相觀也」(同上三〇〇丁)と云ふて居る如きは注意すべきところであらう。要するに羅什三藏は龍樹提婆の空思想に屬する翻譯家で、その禪觀の思想も彼れが翻譯せし般若の經論等に關聯して研究せなければならぬ必要があらうけれども、今は略して置く。

(五)

羅什三藏が關中に勢力を得て、良く諸家の禪觀を融合統一し、畢竟空無所有の空思想を詮顯せられ、禪經の實修と云ふことを勧められたのに對して、南方慧遠の一派は専ら佛馱跋陀羅所譯の『達

『達磨多羅禪經』(『大正藏經』第十五卷三〇〇丁)に依つて習禪を説いたものゝやうである。佛馱跋陀羅は迦維羅衛の人、少より佛火先に就て業を受け、東晋の義熙二年(皇紀一〇六六)長安に着し、羅什三藏に遇ふて互ひに法門を談合したと云ふことである。時に羅什は六十三、佛馱跋陀羅は四十八の年少ではあつたが、羅什に向つて云ふには、「君所釋不出人意、而致高名何耶」と問ひ、羅什は答へて「吾年老故爾、何必能稱美談」と云つたと『出三藏記集』第十四、『高僧傳』第二等に出て居る。羅什の門下三千、常に宮闕に出入して居たのに、佛馱跋陀羅は獨り靜を守り、衆と共にせなかつたので、四方の徒、習禪の爲めに來るものが多かつたと云ふことである。この佛馱跋陀羅は羅什の徒の爲めに擯斥せられ、南方慧遠の招きに應じて、弟子慧觀等四十餘人と共に廬山に行き、『達磨多羅禪經』を翻譯して禪觀を勧めたのである。この『達磨多羅禪經』の譯出は佛馱跋陀羅に取つて最も重要なことで、彼れが長安から擯斥された時に「但恨懷抱未申、以爲慨然耳」と云ふたのは、この禪經の翻譯を指したものであらう。故に南方廬山に入つて先づ本來の意志を果たし、禪觀の弘宣に力めたのである。而してこの『達磨多羅禪經』の内容は一部二卷十七品であつて、數息、不淨、界、四無量、五蘊、六入、十二因縁の七觀を説いて居るが、特に數息觀、不淨觀が大半を占め、小乗の五門の禪觀を明したものと見ることが出来る。これに就ては既に本誌上に於て述べたことがあるから、今は略して置くことにせやう。(註十)その他、佛馱跋陀羅の翻譯としては『出三藏記集』第二に十部六十七卷

と云ひ、『大唐内典錄』第三には一十五部一百一十五卷と云ひ、『開元釋教錄』第三には一十三部一百二十五卷と云へる中、特に禪經思想として見らるべきものは『觀佛三昧海經』十卷(註十二)であるが、その内容は六譬品、序觀地品、觀相品、觀佛心品、觀四無量心品、觀四威儀品、觀馬王藏品、本行品、觀像品、念七佛品、念十方佛品、觀佛密行品の十二品に分かれて居て、父王闍頭檀、姨母憍曇彌等の爲めに觀佛三昧に住し、以て解脫を得べきことを教へたもので、佛身の相好及び功德等を想念觀察したものであるから、五門の禪觀の中に於て念佛觀に屬すべきものであらう。而かも念佛觀にも生身應身觀あり、法身實相觀あり、通觀あり別觀あるが、今は特に大乘の念佛三昧を高唱して居るやうに思ふ。

我今禮一佛即禮一切佛、若思惟一佛即見一切佛、見一佛前有二行者、接足爲禮皆是己身、若以一華供養佛時、當作是念、諸佛法身功德無量、不住不壞湛然常安、我今以華奉獻諸佛、願佛受之、作是念已復當起想、我所執華從草木生、持此供養可用擬想云云(『大正藏經』

第十五卷六九五丁)

と云ひ、華香の運心供養を説いて、上は諸佛に供じ下は一切に施すと云ふ廣大無邊の供養を示し、而かも無相に結歸し、第一義空心と云ひ、更に「遊此空者、諸佛力故、心不著空、於未來世、當成阿耨多羅三藐三菩提得不退轉」と教へられて居る。要するに佛馱跋陀羅は大小乗の達者であつ

て、『六十華嚴』の如きを翻譯した程の人であつたが、しかしまた『摩訶僧祇律』四十卷も翻譯し、持律堅固にして寧ろ手近き實際の禪觀を一般の者に指導せられたものゝやうに思はれる。

## (六)

羅什三藏に依つて關中の禪經たる『坐禪三昧經』翻譯せられ、佛馱跋陀羅三藏に依つて廬山の禪經たる『達磨多羅禪經』翻譯せられ、共に禪經を實修する方面が鼓吹せられ、こゝに習禪者の續出を見るやうになつたのである。而して此の時代の先驅者とも云はるべき人は、晋の太興(皇紀九七八)の末に竺僧顯があつて、『蔬食誦經』業禪爲勢、常獨處山林頭陀人外、或時數日入禪、亦無飢食」と云はれ、晋の太元(皇紀一〇三六)の末には帛僧光があり、竺曇猷があつて、共に山中石室に在つて安禪し、毒蛇猛獸を下したと云ふことである。即ち「忽大風雨、群虎號鳴、光於山南、見一石室、仍止其中安禪合掌云」と云ひ、或は「有猛虎數十、蹲在猷前、猷誦經如故、一虎獨睡、猷以如意扣虎頭、問何不聽經、俄而群虎皆去」と云ふて居る。また隆安(皇紀一〇五七)の頃には釋慧暹があつて、「多栖處山谷修禪定之業」と云はれ、賢護、慧開、慧眞、及び支曇蘭、法緒等があつて、蔬菜安禪、誦經し念佛し、神異を顯はし怪鬼を下したと云ふことが『高僧傳』第十一に出て居る。また道安の門下の道立の如きも「巖居獨處、不受供養、每潛思入禪、輒七日不起、如此者數矣」と云ひ、また慧永の如きも「蔬食布衣、率以終歲、又別立一茅室於嶺上、每欲禪思、輒往居焉」と

云ひ、猛虎を馴伏せしめたと『高僧傳』第六に説いて居る。要するに此等の人は小乗の禪數を實修した人で、安世高、竺法護等の翻譯した禪經を其儘、自己に體驗せんとして、好んで深山幽谷に獨居し、苦鍊辛修した習禪者のやうに思はれる。而して此の時代に注意すべきことは念佛の一門であつて、習禪には念佛とか誦經とかを唯一の方法に見たと云ふことである。かの廬山の慧遠の如きも盛んに禪觀を修しながら念佛を重んじたのであるが、しかし念佛と云ふても今日云ふが如き念佛ではなく、只管靜寂を旨とし、心思の散亂を防いだと云ふに過ぎないものであらうと思はれる。

慧遠は前號にも云ひし如く道安の輪下で、蔚然一家を爲した人である。東晋の咸和九年（皇紀九九四）に生れ、年二十一歳の時、道安が太行の恒山に在つて、般若を講ぜるを聽き、豁然として大悟し、弟の慧持と共に出家して道安を師と仰いだのである。二十四にして講説し、専ら般若思想に老莊の學を加味して説いたものであらう。師の道安が既に老莊の學に通じて居たのであるから、その門下には多く老莊の學に通じた人が出たのである。故に慧遠も『高僧傳』第六に「少爲諸生、博綜六經、尤善莊老」と云ひ、更に左の如き記事まで載せて居る。

嘗有客聽講、難實相義、往復移時彌增疑昧、遠乃引莊子義爲連類、於是惑者曉然、是後安公特聽慧遠不廢俗書（『大正藏經』第五十卷三五八丁）

慧遠は太元九年に廬山の清秀を愛して龍泉精舎に入り、太元十一年に東林寺を建て、賢哲の士、清

信の者を集めて白蓮社を結び、彌陀像前に念佛を唱へたと云ふことは有名なことであるが、これは禪觀から來た定心別時念佛であつて、習禪の唯一の方法として、佛前に佛相、佛德を觀じ、佛名を唱へつゝ觀念を凝したものであらう。彼れの著述に『觀經疏』一卷があつたと傳へる人もあるが(註十二)今はないので委しいことは云へない。彼れの著述に就ては『大唐內典錄』第三に十四部合三十五卷を擧げて居るが、その中に『觀經疏』は見當らないやうに思ふ。

慧遠の入寂は東晋の義熙十三年(皇紀一〇七七)八十四歳であつた。即ち羅什よりは慧遠が十歳も年長ではあつたが、その死は遅るゝこと四年であつた。羅什と慧遠とは一は關中に在り、他は南方廬山に住して、親しく面談の機會はなかつたやうであるが、しかし互ひに書を往復し、また羅什は慧遠の著述たる『法性論』を見て賞歎したと云ふのであるから(註十三)、恐らくは羅什の禪經をも慧遠は見て居たものであらう。慧遠の門下には習禪に志した人として、曇濟、法安、曇邕の如きがあつたが、他方には念佛門を修して居たので、寧ろ慧遠の門下は念佛門の人と見た方が良いかも知れぬ。慧遠の迎へた佛馱跋陀羅の弟子には智嚴あり、寶雲あり、慧觀あり、また玄高があつて、その門下には瑣々たる習禪者が出て居るのである。

## (七)

前述の如く慧遠の門下には禪と念佛とを實修した人が多いのに對して、佛馱跋陀羅の門下には多



く禪と律とを双修した人が多い。その中にも特に禪法に通じ盛名を馳せたのは釋玄高であらう。玄高の傳は『高僧傳』第十一に出て居るが、姓は魏、本名を靈育と云ひ、姚秦の弘始四年二月八日（皇紀一〇六三）に生れ、十二にして出家、禪律を業とし、後に佛馱跋陀羅に就て學び、また外國禪師曇無毘に從つて禪法を受け、それより徒衆の聚るもの三百、その中に於ても玄紹、玄暢、僧隱等が秀で居たやうである。即ち『高僧傳』に依つて見ると、

有玄紹者、秦州隴西人、學究諸禪、神力自在、手指出水、供高洗漱、其水香淨倍異於常、每得非世華香、以獻三寶、靈異如紹者又十一人、紹後入堂術山、蟬蛻而逝。（『大正藏經』第五十卷三九七丁）

と云ふて居る。また玄暢に對しては玄高が元嘉二十一年九月十五日（皇紀一〇〇四）四十三歳にて法難に遭ひ歿せんとする時、神力を現じて多くの弟子に向ひ、

大法應化隨緣盛衰、盛衰在迹理恒湛然、但念汝等不久、復應如我耳、唯有玄暢、當得南度、汝等死後法當更興、善自修心無令中海。（『大正藏經』第五十卷三九八丁）

と遺言して居るのを見ても、玄暢の秀雋なることが知れやう。僧隱は禪律兼備の達者であつて、『學盡禪門深解律要』、高公化後、復西遊巴蜀專任弘通」と云ふて居る。而して此の時代には多くの習禪者があつて『高僧傳』に出て居るものを舉げると、僧周、慧通、淨度、僧從、法成、慧覽、法期等がある。中にも慧覽は罽賓國に遊んで達磨達（註十四）に禪法を學んだ人であり、また法期は智猛（註

十五)に學び、更に玄暢に遭ふて從學した人として有名である。法期の後に尙ほ修禪者として『高僧傳』には左の人を擧げて居るが、何れも禪經實修時代の終りに屬する人と見て良い。

道法 元徽二年死(皇紀一一三四)

普恒 宋昇明三年卒、七十八(皇紀一一三九)

法晤 齊永明七年卒於山中、春秋七十九(皇紀一一四九)

僧審 齊永明八年卒、春秋七十有五(皇紀一一五〇)

曇超 齊永明十年卒、春秋七十四(皇紀一一五二)

慧明 齊建武之末卒於山中、春秋七十(皇紀一一五四)

已上は慧遠並びに佛馱跋陀羅門下の習禪者を擧げたのであるが、その禪法の内容は知ることが出来ないけれども、恐らくは『達磨多羅禪經』所明の禪法を精細に修したものであらうと思はれる。これに對して羅什門下の習禪者は如何なるものであつたかと云ふに、その最も熱心なる習禪者は僧叡であつたやうで、その僧傳は『高僧傳』第六に出て居るが、『禪法要』即ち『坐禪三昧經』を羅什に請ふて譯出せしめ、それを日夜に修習し、また西方を欣求したやうに書いてある。

什叡曰、吾傳譯經論、得與子相值、真無所恨矣、著大智論十二門論中論等諸序、並著大小品法華維摩思益自在王禪經等序、皆傳於世、初叡善攝威儀弘贊經法、常廻此諸業願生安養。

云云(『大正藏經』第五十卷三六四丁)

僧叡の著した經序は『出三藏記集』に出て居るが、それ等に依つて僧叡の禪法を考へて見ると、「禪法者向道之初門、泥洹之津徑也」と云ひ、「日夜修習、遂精鍊五門善入六靜」とあるから、決して進んだ禪觀ではなかつたらうと思はれる。それよりも寧ろ禪宗教學の發達として大に注意すべきものは僧肇と道生との思想であつて、後世の禪觀に非常に影響したものではなからうか。

(八)

羅什門下には『高僧傳』に載するものゝみにても三十三人、その中に於て特に秀でたものは「時人稱之曰、通情則生融上首、精難則觀肇第一」(註十六)と云ひ、道生と道融とは能く人の疑情に通じ、慧觀と僧肇とは善く其の問難を靖んじたと云ふことである。その中、僧肇は羅什の最初の弟子であつて、羅什が姑藏に至りし時、遠く行つて之に隨從し、羅什の嗟賞すること極りなく、十八歳にして共に長安に來た人である。『高僧傳』第六に依つて見ると、

家貧以備書爲業、遂因繕寫、乃歷觀經史備盡墳籍、志好玄微、每以莊老爲心要、嘗讀老子道徳章、乃歎曰、美則美矣、然期棲神冥累之方、猶未盡善、後見舊維摩經、歡喜頂受披尋翫味、乃言始知所歸矣。(『大正藏經』第五十卷三六五丁)

と云ふて居る。彼れの著述としては『肇論』『寶藏論』『註維摩經』を始め、『出三藏記集』に載せて居

る『維摩經序』『長阿含經序』『百論序』等であらう。『肇論』の内容は四篇であつて、『物不遷論』『真空論』『般若無知論』『涅槃無名論』とである。即ち『高僧傳』に依つて見ると、師の羅什が『大品般若』を譯出するや、それに依つて便ち『般若無知論』二千餘言を著して、羅什の賞讃を買ひ、後に『真空論』『物不遷論』の二篇を著し、更に羅什の歿後に及んで『涅槃無名論』の名著を出したと云ふことである。その『涅槃無名論』に云く、

夫涅槃之爲道也、寂寥虛曠、不可以形名得、微妙無相、不可以有心知、……然則言之者失其眞、知之者返其愚、有之者乖其性、無之者傷其軀、所以釋迦掩室於摩竭、淨名杜口於毘耶、須菩提唱無說以顯道、釋梵乃絕聽而雨花云云（『續藏經』第一輯第二編第一套第一冊三八丁）と云ひ、或は「夫至人空洞無象、而萬物無非我造」と云ひ、或は「天地與我同根、萬物與我一體」と云ひ、或は「菩提之道不可圖度、高而無上」と云ひ、みな良く禪門の妙諦を道破したものと云ひ得るではなしか。

また『寶藏論』の内容は三篇であつて『廣照空有品』『離微體淨品』『本際虛玄品』とである。いま其の中の『廣照空有品』の最初の文を擧げるならば、

空可空非真空、色可色非眞色、眞色無形、真空無名、無名名之父、無色色之母、爲萬物之根源、作天地之太祖、上施玄象、下列冥庭、元氣含於大象、大象隱於無形（『續藏經』第一輯第二編

と云ひ、或は「唯道無事、古今常貴、唯道無心、萬物圓備故、道無相、無形無事、無意無心」と云ひ或は「夫天地之内、宇宙之間、中有一寶、秘在形山」と云ひ、或は「聖人不斷妄不證真、可謂萬用而自然矣」と云ふが如きは、共に前賢の未だ嘗て道破せざるところ、而かも後來禪門の常套語となりしものではないか。實に此の『寶藏論』の如きは、僅かに二十五紙の小篇であるが、その全篇の悉くが言外の妙悟を横溢せしめて居るものゝやうに思ふ。その他『註維摩經』に於ても、

無說豈曰不言謂能無其所說、無聞豈曰不聽謂能無其所聞、無其所說故終日說而未嘗說也、無其所聞故終日聞而未嘗聞也。(『註維摩經』卷二。二四丁)

と云ひ、或は「大士美惡齊旨、道俗一觀故、終日凡夫終日道法也」と云ひ、或は「解脫之道無形無相逆之不見其首、尋之不見其後、眇莽無朕」と云ひ、或は「至人無心、無心則無封、無封則無疆、封疆既無則其智無涯、其智無涯則所照無際」と云へる語を始め、全十卷に註せられて居る禪旨は今更こゝで述べるまでもない、實に良く云ひ得て居るので、從來の禪宗教學には深大の影響を及ぼしたものと云はなければならぬ。彼れは羅什の歿した翌年、即ち晋の義熙十年(皇紀一〇七四)春秋僅かに三十有一で仆れた。まことに惜しむべきことである。

(九)

次に道生の傳記は『出三藏記集』第十五『高僧傳』第七等に出て居る。彼れは始め竺法汰に従つて出家し、大に其の堂に入つた後、廬山に幽棲すること七年、慧叡、慧嚴と共に長安に行つて羅什に學び、關中の僧衆その神悟に驚いたと云ふことである。いま『高僧傳』に依つて見ると、

生既潜思日久徹悟言外、廼喟然歎曰、夫象以盡意、得意則象忘、言以詮理入理則言息、自經典東流譯人重阻、多守滯文、鮮見圓義、若忘筌取魚、始可與言道矣、於是校閱真俗研思因果、廼立善不受報頓悟成佛、又著二諦論、佛性當有論、法身無色論、佛無淨土論、應有緣論等、籠罩舊說妙有淵旨、而守文之徒、多生嫌疑、與奪之聲紛然競起。(『大正藏經』第五十卷三六六丁)

と云ふて居るが、彼れの頓悟成佛の説は素より先古未發の卓見であつて、大に研究せなければならぬ問題であるけれども、今のところ、その詳細を知ることには出來ぬ。唯だ彼れの著述と云へる『法華經疏』二卷、『註維摩經』に顯はれたる道生の説等に依つて知るべきである。即ち『法華經疏』には「既云三乘是一、一切衆生、莫不是佛」とか「欲明衆生大悟之分皆成於佛、示此相耳」(『續藏經』第一輯第二編乙第二十三套第四冊四〇八丁)とか云ひ、また『註維摩經』には「無得爲得、無證爲證、若有得則不得也、以不得爲得」とか「無價寶珠是海之所成、一切智寶亦是煩惱所作也、要入煩惱海中求之然後得矣」とか云へる如きは、その説の一斑を髣髴せしめるものと云ふて良い。また彼れは六卷の『泥洹經』が渡來したので、それを盛んに講説し、終に淵旨を得て、「一闡提人、皆得成佛」と喝破

せられたと云ふことであるが、その當時は、未だ『大本泥洹經』の渡來せなかつた已前のこととして、守文の徒より一波瀾を起さしたと云ふことも無理ないことであらう。彼れは「若我所説反於經義者請於現身卽表厲疾、若與實相不相違背者、願捨壽之時據師子座」と誓つたと云ひ、終に『大本泥洹經』の渡來に遭ひ、「一切衆生、悉有佛性」の經說に依つて、彼れの先見に驚き、大に敬服したと云ふことが『高僧傳』に出て居る。彼れは宋の元嘉十一年冬十一月庚子（皇紀一〇九四）に、廬山精舍に歿したのであるが、その弟子に道猷、僧瑾あり、道猷の弟子に道慈あり、共に道生の義を祖述し、また道生と同門の人たる慧觀も、後に道生に共鳴して頓悟説を立てたので、『高僧傳』には「著辯宗論、論頓悟漸悟義、及十喻序贊、諸經序等、皆傳於世」と云ふて居る。『出三藏記集』には慧觀の序として『廬山修行方便禪經序』『法華宗要序』『勝鬘經序』等が載せてある。慧觀の弟子に有名な法瑗が出て居るが、『高僧傳』第八に依つて見ると、「後入廬山守靜味禪、澄思五門遊心三觀」と云ひ、宋の文帝に對して生公頓悟の義を申べたと云ふことである。法瑗の弟子の僧宗も頓悟説を祖述したと云ふことである。また羅什の弟子の僧業に曇斌と云ふものがあつたが、これまた熾んに頓悟の主義を發揮したので有名である。尙ほ『高僧傳』には道生の住して居た龍光寺の後には寶林が住し、その弟子の法寶並びに同じく龍光寺に住した惠生等みな悉く道生の諸義を述べたと云ふことが書いてあるが、兎に角、道生の學説は大に其の當時に喧傳されたことは事實であらう。けれども、

その爲めに禪觀までが新味を加へて、一變したとは云へないやうに思ふ。何となれば宋の文帝（皇紀一〇八五）が頓悟主義の僧を天下に覺められたと云ふ事實が『高僧傳』に説かれ、法瑗が勅に依つて頓悟の旨を申べたるを聞き、「常謂生公歿後微言永絶、今日復聞象外之談、可謂天未喪斯文也」と云ふて嘆ぜられたと云ふのであるから、尙ほ未だ盛んであつたとは思はれない。要するに此の時代は禪經實修時代であつて、『禪經』の所説に依つて實修を勧め、多くは小乗の五門の禪觀を主とし、それに多少の大乗的理議を加へて解釋したと云ふ程のものではなからうか。

註一 境野博士『支那佛教史講話』上卷五四丁參照、その理由に云く、『出三藏記集』に羅什譯あることを云はずして、唯だ曇摩密多譯のみを記し、『歷代三寶記』に至つて、始めて支謙譯と羅什譯とが記載せられ、『開元錄』が認容したまでである。

註二 佐藤泰舜氏『國譯一切經』經集部第四五丁參照、その理由に云く、禪經は特に略名、通名が用ひられ、彼此混同し易いけれども、他に羅什譯出の禪經で、之れに似た名稱のものは『禪法要解』二卷『禪經』三卷（現在二卷にて『坐禪三昧經』のこと）の二つであるが、『出三藏記集』には此の二種の名が明記してあつて、更に『禪法要』三卷を列ねてあるから、これをば『神秘要法經』と見たならば良しのであると。

註三 白骨流光觀のところ云く、「佛說諸法無來無去、一切性相皆亦空寂、諸佛如來是解脫身



解脫身者則是眞如、眞如法中無見無得、作此想時、自然當見一切諸佛」と、また後の空觀のところにも云く、「觀涅槃性、寂滅無相、觀生死相、悉同如實際、作此觀時、不願生死、不樂涅槃、觀生死本際空寂、觀涅槃性相皆同入空、無有和合」と、これ等は共に大乘的の説明であつて、境野博士が『支那佛教史綱』一五丁に、『禪秘要法經』を以て大乘のものとするのは、これ等の説明があるからであらうが、しかし私は經の全體を通じて小乘的のものと云ふのである。

#### 註四

境野博士『支那佛教史講話』上卷五四九丁參照、その理由に云く、『阿蘭若習禪法經』を求那跋陀羅としたのは、李廓が跋陀譯と傳へしものを誤つたのに違ひなく、それは求那跋陀羅ではなく、蓋し佛陀跋陀羅であつて、其の『達磨多羅禪經』即ち廬山の『禪經』と羅什の所謂關中の『禪經』との混雜から來た誤謬であらうと。

#### 註五

『高僧傳』第六の僧叡の傳にも、「常歎曰、經法雖少足識因果、禪法未傳厝心無地、什後至關、因請出禪法要三卷、始是鳩摩羅陀所製、末是馬鳴所說、中間是外國諸聖共造」と云ふ。素より佛説ではなく、諸家の禪要を抄集したものであるから『禪法要』と云ふたものであらうが、これを重要視して經の名目を附し、『禪經』とか『坐禪三昧經』とか云ふやうになつたものであらう。

註六 『歷代三寶記』第八に云く「弘始四年正月五日出」とあり、參照せよ。

註七 『修行道地經』第二の「分別相品」に於ける三門の説明と比較すると、類似の點もあるが、また説明に於て相違する點もあるから、直ちに『修行道地經』に依つて拔出したものと云へなす。

註八 六種の惡覺作用とは欲覺、瞋恚覺、惱覺、親里覺、國土覺、不死覺を云ふ、また八覺を説く經論もあり。

註九 第一の四無量心觀は慈心觀、第二の不淨觀と第三の白骨觀とは不淨觀、第四の觀佛三昧法よも第八の觀無量壽佛法までは念佛觀、第九の諸法實相觀は因緣觀、第十の法華三昧觀法は念佛觀に收めて見ることが出来る。故に數息觀を除いた五門の禪觀と見て良い。

註十 『禪學研究』第十一、第十二、第十三號に於ける拙稿「禪宗の立祖相承に就て」の中に於て、『達磨多羅禪經』の内容を述べたことがある。參照せよ。

註十一 『出三藏記集』には八卷と云ひ、『高僧傳』には六卷と云ひ、現藏本には十卷となる。『大正藏經』第十五卷六四五丁已下に收む。

註十二 『樂邦文類』に載する天臺の遵式の『往生西方略傳序』に云く、「此方諸法師禪師、各造論著疏光讚西方、道安法師往生論六卷、惠遠法師造觀經疏一卷」

註十三 「高僧傳」第六の慧遠傳に云く、「因著法性論曰、至極以不變爲性、得性以體極爲宗、羅什見論而歎曰、邊國人未有經、便闡與理合、豈不妙哉」と。

註十四 達磨達は師子尊者の弟子にて『景德傳燈錄』第二、『傳法正宗記』第九等を参照せよ。

註十五 智猛は雍州京兆の人、印度に行き、『涅槃經』の原本を携へ來た人で『高僧傳』第三を参照せよ。

註十六 「肇論新疏游刃」に此の語を釋して云く、「生公融公能通入疑情、觀公肇公善靖其問難」と。

